

## 土に眠る (6)

### 【6】

ダンスパーティーの後、夏が急速に近づいてきた。というか、ほんとに突然、夏になった。

それは気候だけの問題ではなかった。人が、暮らしが、一挙に夏になったのだ。

もちろん、日射しは強くなった。眩しくて眼も開けていられない。昼が長くなって、いつまでたっても日が暮れない。まだ明るいのに寝る支度を始めて、朝起きると、外はもうかんかん照り。まるで夜がどこかへ行っちゃったみたいだ。いつだったか、夜中に目を覚まして窓の外が暗いのに気がついたとき、すごくうれしかった。暗い夜は久しぶりだった。

で、いつまでも夜にならない長い長い夕暮れどき、部屋でひとり、考えごとをした。考えごとだなんて！ そんなごたいそうなことじゃないけど、ふっと思いが自分のことに絞られていくことがある。まるでネジをまくみたいに。そんな瞬間を、前は努めて避けてようとしていたみたいなのに、気がするのだけど、今はそれをとでもだいたいにした気分になっている。そんなふうに、昔のことを考え直してみたりする。

父さんが女の人と別れたということ、ユミはどういうふうに知ったのだろうか。誰も、なんにも、ユミには言わなかった。別れたことどころか、好きな人がいるということだった。ママがいちど口をすべらしただけ。でも、ママが言わなくてもユミは知っていただろうという気がする。はつきり言われる前に、そのことはすでにユミの心の水面下にあって、浮上するばかりになっていた。だって、ママ

## 土に眠る (6)

がああ言ったとき、ユミはびっくりしなかったもの。ママに向かかってどんな顔をしたらいいのか、なんて言ったらいいのか、わからなくてまごついたけど、事柄そのものには驚かなかった。

それと同じ、女の人と別れた時も知っていた。もっと重く知っていた。ママの眼が明るくなり、反対にパパがいつも疲れたように沈んでいることが多くなった。うつむいた顔を上げると、ユミのことをじっと見つめて、放心したように眼を離さなかった。それがユミにはとてつもなく重かった。

あの事が起こったのは、そう、高二の秋。

学園祭の準備で帰りが遅くなることがあった。通っていた高校は県下で二番手の進学校だったから、二年生が文化祭の主力になる。文化祭が終わったら、さあ受験。それが学校全体の暗黙の了解だった。

クラス展示で松宮くんと同じグループになったとき、ユ

ミは内心うれしかった。ような気がする。でもそれはちよっぴりだけで、ほんとに好きだと気がついたのは、展示の仕事で何度かいっしょに放課後を過ごした後だ。道具を渡そうとして眼が合うとドキドキした。もしかしたら松宮くんもユミのことが好きなのかもしれない、そう思うこともあったりしたけど、思うだけで怖いような気がした。

文化祭の前の週は、暗くなるまで準備をした。電灯のついた学校は、いつもとぜんぜん違う雰囲気で、なんというか、ロマンティックだった。

そして、帰りは松宮くんがユミを家まで送ってくれた。方向が同じだったから。それだけだったけど。

三度目に送ってもらった時だった。門のところまで、ふたことみこと、立ち話をしていたら、ガラッと玄関が開いて、父さんが顔を出した。そして、

「そんなところで、いつまでも話しているんじゃないッ」  
ものすごく強い声でどなった。

## 土に眠る(6)

松宮くんとユミは飛び上がりそうにびっくりして、「じゃ」と、すぐに別れた。松宮くんが向うに歩きかけたとき、父さんはその背中に向かつて、

「オイ、君、名前はなんていうんだ」

けんか腰で叫んだ。ユミがはじめて聞くようなお腹にひびく声だった。松宮くんは度肝を抜かれたみたいにな、

「マ」

と、かすれ声で言っ、いったん唾を呑み込み、それから改めて、

「マツミヤ」

と答えた。松宮です、でもなく、ただ名前だけ言っ、その言葉尻が闇に溶けた。父さんは、ふん、と言葉にならなようなことを言っ、一人でさっさと玄関に入っ、しまっ。

その夜、父さんは食事中ユミに向かつて、外から帰っ、きていつまでも門のところまで立ち話なんかしてははいけ

ない、暗くなる前に帰宅しなくてはいけない、とお説教をした。お説教めいた顔を取りつくるっ、はいたけれど、なんかぐちぐち言いわけしているような言い方だった。そして最後に、

「なんだ、あいつ、ろくに挨拶もできないじゃないか」

吐き捨てるように言っ。そのひとことが、ユミの心に深く突き刺さった。

次の日、学校で松宮くんはそっとうかがうようにユミの顔を見た。まるで悪いことをして謝る機会をうかがっているようなやうすだったけれども、もちろん松宮くんは少しも悪くない。それはユミもわかっていた。よくよくわかっていたけれども、それでもなぜだか、松宮くんに優しい顔をすることができなかった。それどころか、ツンと、冷たい顔をしてしまったのだ。どうしてだろう、わからない。なぜだかわからないけれど、それ以外に、どうすることもできなかつた。

## 土に眠る (6)

その日から、ユミと松宮くんは口をきかなくなった。それはどうしようもなく悲しいことだった。

文化祭最終日の夜、キャンプファイヤを囲んで歌をうたった。気がつくのと、松宮くんが斜め後ろに立っていた。そして黙ってユミに何かを手渡した。一枚の葉っぱだった。家に帰って机のスタンドの灯りで見たら、真っ赤に色づいたハナミズキの葉だった。ユミはその葉を英語の辞書にはさんだ。

それからだ、ユミが勉強ができなくなったのは。成績が落ちたという意味ではなくて、ほんとうに勉強することが不可能になってしまったのだ。

もちろん成績もがた落ちだった。トップを切るほどではなかったけれど、それまでまあまあ上位だったのが、みるみる下がった。我ながら感心するほどだった。でもそれは結果としてあとからやって来たことで、ユミにとっては、勉強することができなくなってしまったことほどには大きなショックではなかった。

机の前に座っても何もできない。本を開けても頭が働かない。まるで、頭の中のどこかがロックされてしまったみたい。これはほんとうに、すごく重いことだった。

ユミの両親にとっても、そのことは大きなショックだった。みたいだ。父さんの浮気騒ぎ以来はじめて、二人は真剣に相談をしたらしい。ユミはよく知らないけど、どうもそうのようだった。そしてある日、二人してユミを問いつめた。ユミは両親が並んで自分の前に座っているのを見て、妙に新鮮な感じがした。こういうの久しぶりだ、なんて思っていた。

どうしたの？ と二人は言った。どっちが言ったのか、わからない。口をそろえて言ってみたかった。こういうときだけ、二人は口と心をそろえるんだ、とユミは思った。

でも、そう言われても、答えることばを、ユミは知らな

## 土に眠る (6)

かった。だって、自分にもわからないんだもの。まるで頭のなかで錆びついてしまったようなかんじを、どう伝えたらいいいんだろ。ギシッと鍵が掛かったみたいだなんて。黙っているしかなかった。

二人はユミが反抗しているのだと思ったらしい。ほんとは、そういうことではなかったのだけど。反抗するほどの元気もなかったのだけど。

ユミはそれきり、深い水の底にいるような時間を過ごしていった。日々がどう過ぎていくかという実感も、あまりなかった。周囲では友だちが受験の話をしはじめた。それが、まるで厚いガラスの壁をへだてた向こう側のことのようにだった。ここから逃げ出したい、ただそればかり考えていた。

いろいろあって、というか親たちにとってはたぶん大騒

動の果てにフランス行きが決まったとき、ママは、

「まあ、かかるお金は大差ないけれど」

ため息をつきながら、言った。為替のレートが変動になってから日本円がとても高くなり、それと平行して物価も上がって、東京の大学に出すよりフランスに留学させるほうが安上がりだという人までいる。

「お隣のお嬢さん、東京でマンション借りるんですって。お父さんが上京する時にホテル代わりに使えるからって。それに比べれば、フランスの地方都市のほうがまだ安上がりかもしれないわねえ」

そう言う胸元が大きく上がり下がりに荒れていた。ママはだんだん太ってきて、そのせいか息づかいが荒くなり、ため息とふつうの呼吸と区別がつかないこともあった。ていうか、ユミを見るとため息をつかずにはいられなかったのか。ママが荒い息をつくとき、それだけで後ろめたい気分になった。父さんもたぶんあの頃、そんなだったと思う。

卒業式の日、ユミが夏からフランスに私費留学するとい

## 土に眠る (6)

うことを聞いて、女の子たちがまわりに集まった。

「いいなあ、フランス。私も行ってみたい」

「フランス語ペラペラになっちゃったりして」

あまり肩身の狭い思いをしないですんだだけがもうけもの、とユミは思った。石みたいに固くなっちゃったユミの心のことなんか、誰もわかってくれなかった。フランス語が話せるようになったら、なるわけないじゃないのさ。ただ、ここを出たい。それだけ。

松宮くんは三年生になってからびっくりするほど成績が上がって、東京の超有名私立大学に合格した。それもがっくりだった。

イヌ君はきよろきよろあたりを見回している。この人はいつもそう。いっしょにいて、ユミはちよつと恥ずかしいこともある。でも、こんなだから友だちがいっぱいできる

んだろうな、とも思う。イヌ君がいなかったら、ユミにはいまだってひとりも友だちがいなかったにちがいない。それにしても……

「アンドレが死んじゃうなんてねえ」

ため息が自然に出てしまう。

「なにアンドレ？ どうして死ぬのさ。死ぬわけないでしょ、結婚するっていうのに」

イヌ君が言った。目はまだ、あちこちさまよわせたまま。

「結婚するって、どういうこと？」

ユミが思わず大きい声を出したので、イヌ君はびっくしてこっちを見た。

「だから言ったじゃないのさ。来週結婚するから、それで今夜はアンテールマンなんだった」

「アンテールマンで、お葬式じゃないの？」

「そうだけどさ。男は結婚するともう独身時代みたいに自

## 土に眠る (6)

由に遊べなくなるでしょ？　だから、かわそうにって、最後に男だけで遊びまくるの。そのことアンテールマンていうんだよ。あれっ？　ユミちゃん知らなかったの？　まさかほんのお葬式だっと思ってたわけないよねえ。…あれえっ、思ってたんだあ。ごめんよね。いや、でもオレが謝ることじゃないな」

確かに。イヌ君が悪いわけじゃない。でもほんとにびつくりした。おかげで考えなくていいことまで考えちゃったよ。それにしてもアンドレ、どんな人と結婚するのだろう。ふと、そんな思いが頭のすみをよぎったちようどその時、ユミの気持ちを察したようすはまったくななしに、イヌ君が言った、

「アンドレもフランソワーズも、ふたりとも学生だからさ。いま結婚すると、ヴァカンスがのんびり新婚生活になるっていうわけ」

「ふーん、フランソワーズっていう人なの」

「ユミちゃんだって知ってるでしょ、ワイン・カーヴのドライブにも来てたし」

思い出した！　ていうより忘れない。カーヴのある庭で大声で騒いで、それにダンスパーティーの時にアンドレの膝の上に乗っかって動かなかった人。ということは、なんだあ、あのふたり、婚約してたのかあ。ということはずまり、私、ちよっぴりヨコレンボしたってわけ。なんと、なんと。

西陽が道の向こうの建物を赤く染めている。陽に染まったデイジョンの建物は、ほんとに温かそうだ。石のせいだろうか。底のほうからたっぷり滲み出てくるような赤茶色。この色とも、いつのまにかおなじみになった。

ぼんやり見てたら、カフェの前へマダム・サキヤマが通りかかった。ガラス張りの店内を覗くようにしている。ここは一種の日本人溜まり場だから。

「よお、マダム・サキヤマ！」

## 土に眠る (6)

すかさずイヌ君が手を挙げて呼び止める。マダム・サキヤマは気がつくど領いて、店に入ってきてきた。それを待つあいだ、ナオミはイヌ君に、

「ねえ、サキヤマって漢字だどう書くの？」  
長らく気にかかっていたことを訊ねる。

「前と山。ふつうそう書くんじゃない？」

イヌ君は当り前のように言った。そんなことないよ、崎山とか、たまに向山とか…。ユミは思ったけど、口に出さなかった。そんなことより、漢字がわかったことでマダム・サキヤマが、いや前山さんが、急にふつうの人のように感じられることに驚いている。

「井上さん、私こっちで就職することにした」

椅子にすわるなり、前山さんはイヌ君の目を真正面から見て、言った。

「え、ほんと。こっちって、デイジョン？」

「ううん、パリ。このあいだ日本から知り合いが来たんで

パリに行ったのね、そのとき決めてきた。だいぶ前から話  
はあったんだけど、決心がつかなくて…」

「そうだよ。ガクモンやめるんだもんねえ、このマダム・サキヤマがさあ」

「そんなたしたものじゃないわよ、私の勉強なんて。それより他の…、ま、いろいろね」

「ん…」

イヌ君もさすがに言葉が出てこないようで、ただ領いて  
いる。しばらくして、

「そうかあ。マダク・サキヤマがついにフランスに骨を埋  
める覚悟をしたのかあ」

感無量なような、どこか笑いを取るような口調で言って、  
空を見上げた。

「それもおおげさ」

前山さんは笑っている。はじめて見るような伸びやかな  
笑顔だった。

## 土に眠る (6)

「ちょっとした気分転換かな。といってもわたし、気分転換はすぐくへたんだけど……」

イヌ君と顔を見合わせて言う。深い眼の色だ。ふたりの思いには言うに言えないことがあるのだろう。

「で、あなたははどうするの？　まだフランスにいるつもり？」

ふいにホコサキがこちらに向いた。え？　わたし？

「わたしは日本に帰ろうと思ってます。帰ってたぶん大学受け直すと思います。まだちゃんと決めたわけじゃないけど……」

自分でも思いがけないことばが口をついて出た。そう、まだちゃんと決めたわけではないけれど、心の奥でぼんやりと考えていた。

目標もなくフランスで暮らしているあいだに、いろんなものに出会った。ブルゴーニュの奥の、田舎というよりもっと引つ込んだところの教会や、プロヴァンスの海や料理。それにフランス人の暮らしぶりや考え方も。

でもそういうものに近づくには、いまの自分はまだあまりにものを知らなすぎる。やっぱり何か足がかりになるものが必要。使える道具も必要。フランス語も、いまのままでは心細い。いろんなものでもう少し自分を強くしなくちゃ。その後で、もう一度フランスに出直してこよう。そんなことをぼんやり考えていたのが、いまふいにことばになった。でも人に話したのははじめてだった。口に出してみたら、気持ちが悪くてもはつきりした。

前山さんは一瞬わたしの眼をのぞき込むようにして、それから、

「そう。それじゃあ、もうだいじょうぶなのね？」

と言った。そう言われたら、思いがけず胸の奥が小さく疼いた。ん、やっぱり。

だいじょうぶかどうか、それはわからない。わからないけど、でも、それをしなくては前に進めないことだけは確

## 土に眠る (6)

かなような気がする。大学に行くってことじゃなくて、それよりもっとだいたいなこと。たとえば松宮くんに会って、あの時の自分の気持ちの説明すること。そうやって自分の傷を乗り越えること。それで何がどうなるというわけじゃないけれど、もちろん。

「えーっ、何がだいたいようぶなのさ。何かあったわけ？ ユミちゃん」

「ふふ、何もないわよ。ただね、この人ちょっとわたしに似てるから」

前山さんはそう言って、また笑った。今度はびっくりして、声も出なかった。

マダム・サキヤマのこと、すごく嫌いだと思ってた。自分とはぜんぜん違う人だと思ってた。でももしかしたら、見かけより深いところで似てたのだろうか。それで、反発してたのだろうか。

「なんだよなんだよ、ふたりでかっさに納得してえ」

イヌ君はすねたような口ぶりで言ったけど、べつに本気で機嫌をそこねているようでもなかった。

「そうよねえ。いつまでもいたら、この人みたいにフランス浪人になっちゃうものねえ？」

前山さんは、イヌ君をふりかえってそう言って、また笑った。笑うとききれいな人だった。

日本へ帰ってほしいふうかどうか、それは自分でもわからない。でもたぶんママとパパはだいたいようぶなようだった。先週ママから来た手紙には「先週の日曜日、河口湖へドライブに行ってきました。パパが誘ってくれたので」と書いてあった。字がだんだん小さくなっていて、それがはにかんでいるように見えた。ほんとに世話のやける親子たち。

道の向こうを、十二、三歳の女の子が白いドレスを着て、通って行く。そばに晴れがましい顔の家族たち。ブルミエール・コミュニティオン（初聖体）の少女だった。レースのベ

## 土に眠る (6)

ールに小さな花がいっぱい。カトリックの入門過程を終えたお祝いという話だけど、町の写真屋さんに飾ってあるたぐさんのポートレートを見ると、日本の七五三と変わりない。つまりは、こどもが立派に成長したお祝いなのだ。その一団を目で追いながら、

「かわいいねえ。小さな花嫁さんみたいだ」

イヌ君が優しい声で言った。

「でも、考えてみると、あれ修道服なのよね。一日限りの修道女。：そういういえば、結婚するのも修道院に入るのも似たところがあるかもしれない」

サキヤマさんが言う。それから少し黙っていたあとで、

「私も修道院に入ろうかと、ずっと考えてた」

独り言のように言った。

「ジョーダン」

イヌ君が勢い込んで言う。そして、ぜんぶを急いでほんとは冗談にしてしまおうというように、

「ねえねえ、この子だったらさあ、アンテールマンのこと、お葬式だと思ってたんだよう」

わたしのほうをあごでしゃくる。

「アンテールマンはお葬式よ。土に埋めるって意味」

「そうじゃなくなってるえ。ほら、男が結婚する前に、独身最後のアンテールマンやるじゃない。アンドレが明日それなのよ。そしたらユミちゃん、アンドレが死んじゃったのかと思って、沈みこんじゃった。まったくねえ、モノを知らなすぎるよ、あんたは」

イヌ君が言いつののを放っておいて、前山さんは、

「人間は生きてるうちから何度も死ぬのよ。少しずつ死んで、自分を葬って、また新しく生き始めるのかもね」

さりげなく言った。わたしを励ましてくれているのかもしれない。そんな気がした。

夕空がだんだん赤みを増していく。明日もいい天気だろう。そしてわたしは、ここディジョンの学生寮の庭の片隅

## 土に眠る (6)

に、松宮くんの枯れ葉を埋めよう。  
わたしの小さなお葬式。一度死んでもう一度、新しく生  
き始めるための。  
ううん、そうじゃなくて、葉を落とした樹みたいにも、こ  
この暮らしは長い冬のあいだの眠りだったのかも。  
またの春に目覚めるための。

完

(初出 ホームページ「佐々木涼子の部屋」二〇二〇年四月)